

ベストセラーの 裏側

『国家の品格』（藤原正彦著）がベストセラー一位になったことにも示されているように、昨年は新書の好調さが目立った一年だった。特定のテーマに関する知識・情報を、雑誌感覚で手軽に入手したいと考える人が増えているからだろう。外交に不可欠な情報（インテリジェンス）に

手嶋龍一・佐藤優「インテリジェンス 武器なき戦争」

手嶋（略）ここで重要なのは、インテリジェンスに関わる人間の資質の問題です。公のことがらに関わる官僚に人を得ていなければ、国家はその舵取りを大きく誤る危険がある。

佐藤 だからこそ、日本という国家を立て直すには日本のインテリジェンスを立て直すことが求められる。（略）



関して、元NHKワシントン支局長の手嶋龍一氏と元外務省情報分析官の佐藤優氏が対談した『インテリジェンス 武器なき戦争』（幻冬舎新書・七四〇円）は、そうした需要にこたえた典型例と

いえる。昨年十一月の刊行と同時に増刷が決定。これまでの発行部数は二十万部（七刷）に達している。

面白そうだが、なかなか全貌が見えにくいインテリジェンスをテーマとしていることが人気の理由。「九・一一」にイラク

戦争、最近では（ロシアから亡命した元スパイの）リトビネンコ氏毒殺など様々な国際的事件があり、その裏側を知りたいと思っている人が増えている」と担当編集者の志儀保博氏は話す。

さらに著者二人の高い知名度も売り上げを後押しした。手嶋氏は小説『ウルトラ・グラマー』がベスト

「知りたい」に応えるテーマ

トセラーとなり、佐藤氏は近著『自壊する帝国』が昨年の新潮ドキュメント賞を受賞している。大型書店で本書が積まれているコーナーには、二人の迫力あるポスターが掲げられている。

幻冬舎は新書市場に参入したばかりで、本書は最初に刊行された十七冊のうちの一冊。創刊の目玉とされ、初版部数も四万部と最も多かった。このため、好調な売れ行きは「狙い通り」（志儀氏）という。話題性が見込める本を作り、積極的な広告によってベストセラーに育てていくという手法は、新書でも生きているようだ。